

《書評》

『ワードマップ 現代観光学：  
ツーリズムから「いま」がみえる』

遠藤英樹\*・橋本和也\*\*・神田孝治\*\*\*編著、寺岡伸悟\*\*\*\*・山口誠\*\*\*\*\*・  
須永和博\*\*\*\*\*・森正人\*\*\*\*\*著、新曜社、2019年

堀 野 正 人†

本書は、人文社会科学的な立ち位置から、現代の観光を分析する理論や視点を提示するとともに、観光の考察を通じて現代社会のありようを論じようとするものである。その記述は次のような流れで展開されている。まず、観光という社会現象を歴史的な変化のなかに位置づけ、代表的な学説や理論的視点を示す基本概念について論じる。さらに、近年登場してきたいくつかの観光（ツーリズム）の形態を各論的に取り上げて分析している。これらの展開を受けて最後に、フィールドを切り口として理論を応用しつつ具体的な問題にアプローチする。以下では四部で構成される内容をおおまかに述べてみたい。

「I部 観光の歴史と観光学」においては、「観光とは何か」からはじまり、資本主義社会成立以降の観光の歴史を概観している。観光は、近代資本主義社会とともに展開してきた現象であり、その経済的発展を背景にした大衆観光（マスツーリズム）こそが研究の基本的な対象であることが示される。資本主義社会における時間／空間の圧縮とともに観光は発展するが、そこには空間の均質化と差異化という矛盾した特徴が現れる。また、観光はバックツアーに象徴されるように、鉄道、ホテル、見どころなどを組み合わせ、リスクと不確実性を排除した合理化された活動として組織化される。こうした動きは、社会関係がローカルな文脈から切り離され、より広い時空間のなかで再統合される「脱埋め込み化」としてとらえることもできる。

さらに議論は、現代における観光を考える際に有効かつ不可欠と思われるポストモダンの位相へと展開される。現代社会は、人、モノ、資本、情報、観念、技術などが世界中を移動しながら、相互に絡み合い新たな現実を絶えず生成させているが、とくにデジタル革命を経たメディアがこのモ

---

\* 立命館大学文学部教授

\*\* 京都文教大学名誉教授

\*\*\* 立命館大学文学部教授

\*\*\*\* 奈良女子大学大学院人文科学系教授

\*\*\*\*\* 獨協大学外国語学部教授

\*\*\*\*\* 獨協大学外国語学部教授

\*\*\*\*\* 三重大学人文学部教授

† 二松學舎大学文学部教授

m-horino@nishogakusha-u.ac.jp

ビリティを現出させた役割に着目する。かくして、ツーリズム・モビリティという鍵概念が提示され、様々なモビリティが観光を形づくり、パフォームされる場所を形成し、観光地をつくったり破壊したりすることに焦点を当てる必要が説かれる。

次に「Ⅱ部 観光学の視点」では、「観光経験」という観光者個人にかかわるミクロな視点から、「伝統の創造」「ポストコロニアリズム」という社会全体にかかわるマクロな視点まで、現代観光の特徴を分析する際に有効な「理論的な視点」を提示している。観光への人文社会科学的なアプローチにおいて、繰り返し引用され議論の対象となってきた「観光客のまなざし」「真正性」「シミュレーション」といった鍵概念について、最近の議論の展開を視野に入れつつ解説をしている。また、これらにかかわる「メディア」「文化産業」などのテーマにふれ、社会経済システムとの関係にも目を配る。さらに、「パフォーマンス」「感情労働」というテーマでは、ゲスト・ホストの所作や情動の問題にも注意が払われる。

「Ⅲ部 観光学のテーマ」では、「オルタナティヴ・ツーリズム」「宗教ツーリズム」「スポーツ観光」をはじめ現代観光学が考察対象とする、個別的な観光形態をテーマとして取り上げ、そこから何がみえてくるのかを論じている。マスツーリズムへの批判や反省のなかから、もう一つの形態の観光として登場してきたものとしてオルタナティヴ・ツーリズムが説明される。その具体的な形状として「エスニック・ツーリズム」「エコ・ツーリズム」「グリーン・ツーリズム」などが挙げられるが、これらの観光に共通するひとつの特徴は、自然、先住民族、農山村などの「地域文化」や「地域性」が前景化し、ローカルな主体として現れた地域の人びとの文化の発見・創造に焦点が当てられることである。

最後に「Ⅳ部 観光学のフィールド」では、観光社会学、観光人類学、観光地理学を中心に、これらのフィールド・リサーチの成果を概観している。観光社会学の視点から、①奈良・観光と地方再生、②リヴァプールにおける「ミュージック・ツーリズム」、観光人類学の視点から、①人・アート・コト・地域、②タイにおけるコミュニティ・ベースド・ツーリズム、そして観光地理学の視点からは、①四国遍路、②与論島観光の調査における多様な発見・解釈の創造、というテーマで論述されている。

本書を読んで、評者なりに理解したことを述べてみたい。まず、観光という現象は、現代社会の重要な特徴を投影しているということだ。「ツーリズムから『いま』が見える」というサブタイトルからも窺えるように、現代社会に内在する問題が尖鋭化して、あるいは先行して現れているのが観光という領域なのである。揺るぎない本物の存在への懐疑や、文化のヒエラルキーや領域の融解といったポストモダン的な状況、オリジナルのないコピーの繰り返しとして現れるシミュレーションとしての社会や文化があぶり出される。あるいは、グローバルに展開する資本によって絶え間なく拡張する文化の商品化と、それに対抗する地域主体の運動といった問題系も観光と深くかかわることが理解できる。

とくにⅢ部を読んで改めて確認したことは、社会や文化の観光化であった。現代社会では、様々な領域が人・モノ・カネ・情報などの移動を通じて観光に接続され、時として観光に包摂されていく。このことを象徴的に示すのが、「〇〇ツーリズム」と命名される現象の広がりだろう。本書で扱われた〇〇に相当する「先住民」「宗教」「スポーツ」「ダーク（負の遺産）」などの事象は、もとは観光とは別の文化的文脈に置かれていた（と理解されてきた）ものである。そうした〇〇という文化事象と観光が交錯する時空に立ち現れた「〇〇ツーリズム」と称される新たな社会現象を明

示し、その意味を問うていく挑戦的な姿勢には共感を覚える。

人文社会科学的な視点から観光についての基本的な概念や論点を幅広く解説する書物は、これまでも何冊か刊行されている。本書の編者・著者諸氏もそうした仕事に携わり、観光研究を牽引してきた論客たちである。本書は、これまでの書籍からさらに歩みを進め、理論と事例の研究成果をまとめた点にその特長を見出すことができる。専門的な学説や概念について高いレベルと密度を保ちつつ、これほどまでにコンパクトにまとめた書籍はなかったと思われる。

最後に、気になる点を若干あげさせてもらえば、一つは、重複した記述内容が散見されることである。もちろん、重要な学説や概念は、テーマや分析対象が異なれば繰り返し用いられることは当然であるが、もう少し整理されてもよかったのではなかろうか。もう一つは、観光現象を解説するために社会学、哲学等の専門用語が多く用いられているが、それらの説明が不足しているように感じる。とくに初学者にとっては理解のハードルが高いただろう。紙幅の制約があることは承知しているが、脚注をフルに活用すればかなりカバーできたのではないかと思う。

ところで、本書の刊行は2019年であるので、当然ながら新型コロナ感染の世界的拡大という状況は視野に入っていない。今後、コロナ禍が観光に及ぼす影響や、アフターコロナの観光について議論が活発になるだろう。その際に、これまでの議論には修正が加えられ新たな展開が試みられると推測するが、観光を理解するための重要な学説や概念、テーマといったものを確認するための土台としての役割が本書には期待される。

ともあれ、本書が、現代の観光という社会現象についてのまさにワードマップであるとともに、高い専門性を兼ね備え、研究領域を横断的に俯瞰する有効な手立てとなっていることは間違いない。